特別支援教育の扉 №78　　令和５年１１月２９日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

とれたて直送便、感謝祭！

「抱きしめる、という会話」　金子みすゞ

子どもの頃に　抱きしめられた記憶は、人の心の奥の方の大切な場所にずっと残っていく。そうして、その記憶は、優しさや思いやりの大切さを教えてくれたり、一人ぼっちじゃないんだって思わせてくれたり、死んじゃいたいくらい切ないときに支えてくれたりする。

子どもをもっと抱きしめてあげてください。ちっちゃな心は、いつも手をのばしています。

「コンタックＥＸ」のＣＭより

人が一生で涙する時間は約19日間。家族とご飯を食べる時間は約３年。人が風邪を引いている時間は約５年。咳や熱にこんなに長く人生を邪魔される。もしその５年が自由に使えるなら何ができるだろう。たくさんのことを我慢した。だから一日も無駄にしたくない。何気ないけど**二度と来ない今日を大切にしたい。**

「自立とは、頼れる人がたくさんいること」

人は皆弱い生き物である。だからこそ、人は人に頼って生きていかないといけない。しかし、素直に自分の気持ちを表現することが不得手な人は、人に頼ることが苦手となる。そして、人は人に頼れなくなると、モノに「依存」するようになる。

人に頼ると心が満たされるので健康的になれるのに、それができないから、モノに「依存」して満たされない部分の「埋め合わせ」をする。所詮、モノはモノでしかない。残念ながら、モノは心を完全に満たすことはできない。

「人間関係をよくする言葉」

「してくれて当たり前」と思っているから、「してくれなかったとき」に腹を立てることになる。「妻だったら、これくらいのことをするのは当たり前だろう」「夫なら言わなくてもしてくれるはずじゃないの！」といった言葉が双方から出るようになると少しずつ破綻していく。親子関係も同じ。子どもがお手伝い等、少しでも役に立つことをしてくれたら、**「ありがとう」「うれしい」**という言葉を積極的に使おう。

「百匹目のサルの話」

ある山に、たくさんのサルが住んでいた。あるとき、一匹のサルが餌を洗って食べ出した。周りはそれを見て笑っていたが、そのサルは来る日も来る日も餌を洗って食べ続けた。そのうちに、周りのサルの中にも餌を洗って食べ始めるものが出てきた。あるとき、餌を洗って食べるサルが百匹に達したとき、餌を洗う風景が「当たり前」となり、いつのまにか全てのサルが餌を洗って食べるようになった。

文化というものは、一日にして構築できない。しかし、**正しいことに向かってひたむきに一歩一歩踏み出す**ことこそが、新しい文化をつくる最善の手段なのだろう。

「技術面だけでなく、精神面も磨くことが大事」

一見技術的に思える部分もちゃんと感性や人生観を様々と映し出してしまう。例えば、コピー機を使うとき、できるだけ静かに作業をする人、サイズをよく間違えて紙を無駄にしたり、コピー機に毒づいたりする人、相手がコピー機でなく、人間の場合でも共通している。

単なる**機械の操作一つでも、人間性が表れてしまう。**

とれたて直送便を楽しみにしているという読者の声に応えました。**「情報が人を動かす」**、これからも新鮮でおいしい情報をどこよりも迅速に直送しますので、ご笑味ください！